へ 5
6635

青海波図して[illegible]

[illegible]

へ5
6635

<2002-24>

肖像は図してみせまゐらする
好手ならずやとも笑ひぬらん
書く好の節る

宗くてみん母まきはおかしきや鏡之
拾く久しき老残せりし松
いまも誰の寿ありて筆とる海
庵松かりふしこよの海み

初編

春部

半掃庵 也有著

梅まちもまてし花や春の暦
えりや雪は婦せる人のうしろ
若草は浪ま鼓はうしめ毎ぬ
松竹のあとこもとて門りかわ
鶯は山の気ぬのうや明乃春

たちこしやましらせぬ若菜哉
小路乃歯もしら雪ふりて若菜哉
足にふるゝ諸共なる若菜摘
君しれる名残を惜しむ若菜売
若菜なく日増と白髪の根芹哉
七草の此や野味噌ならもしてさき
七ぐさを清ひの具のさか白ひ於く
暦まもと七時に逢つゝ菜川え

垣ましき庭しろ世をうきて梅の花
小さく泥のゝ庭まて梅の花
渓村も一えくに咲ぬ梅のさかり
背戸までの跡こて清ぬ梅のかな
八重沢名なる高とて遠し梅のかな
見渡ら高はふ家まで白し梅のかな
小路乃泥ゆく垣根や梅のかげ
梅の香や耳つく猫の新かるし

梅の香や
花新しく茶の湯さそふ世の文字なし
涼しけやむかしの友の坊をたつね行
涼しけや梅にわかれてほりみち
此面かと庭の道よりわけの時ゆき
娘たち香と匂ひり立花や茶の木細
のうしは折さて落さやまさる此雨
筆の事有り絵を清水の流れ雪

月さ去年の暦と柳まての那
旅らしき春の風や去りの雨
まこと花の幕と推氣まで此面
筆清海世界に流れ去る舩
笛の路巾にあかす神楽の那
ころひをあきにして守る敷簾
黄鶯や二葉のうは余烏の数
茶竹やまこと井筒に背比べにし

武蔵野は河にしられぬきさ　梅に
横ほしとて見せさを風の柳の絲
上へ下へ延ぬるも流し　柳の面
折ふしの枝しをれて　梅の始
今朝も花しく露も風の柳の末
早い花を追い花咲なき柳の面
こぼれ梅を淵かし花ぬ散るきは
屋根かきしたき○　垂る柳枝

積雪を月や見ゆる庭のみち
月は舞上梅の匂ひ（冥）おぼろつき
風清き霞立かわおぼろ月
隠すやもの花は尾花　月
行綴る花流して見られ花の月
差かれ月は昏ぬ月○や霧つき
三か月の暫くかけし松の清き
梢ゆきて夜更けておぼろつき

足柄乃山平も出まて　蔦の那

鶏すか年ふところか表相乃雨

出代り乃伊達やこゝろの浅黄うら

出かはりや何処まで縁まゆすか　計の語

初午や稗きみともに芝ひとし

福寿や禄直り代ある庭風俗

羽梅に羽はしき乃谷のあめ

寺町や猫と涅槃の志ん　云常

花より噺縁もなくかきて涅槃哉

今も猶葉ゆくさくる禄ぞん淵

桃一本くらまくらに下山事かな

青海苔にさらく白魚の目の影

桜さく芳野のかひ肉禮雛

浅きなる菫や麻乃手もかくれ

湖干とはさしぬ身目出たし西

川魚の浅へ買うて汐干かな

万葉乃細りつゝ後やことはた於
雛売りし家や桃に傀儡師
藪さへ手はありとの浅帯雛
乃乙女の笠きぬうちや田螺とり
尼寺の雛も見物し桃の花
畦一筋川となりけり田の水
去ぬ如くと見えて燕や菜の花
桃の咲頃や湯浴にわたり川

曲水に杯口と流れてつきさり車
春雨の中に競馬せしく娘茶亦
永日りの幕にくむやはら待
試楽に撲ち出して頭はらく秋
寐覚の庭になしるはらくの南
燦くや花盗人の後ねるしく
頭巾まと惜ふれぬ花や花くと有
こ地の花咲く鄰に酔人成

山吹やあれた垣に鳴蛙かし
うれしみな藤の猫や松の娘かし
花もいろ目はかりな陸の雨
漉くいとて飛小田もあれて陸の跡
井の内や花さそう雨にほく垣
笠と寄と習いて雛子の恋
一夜雨に寄に尾やとく雛の声
笠あれもし一年熱いて花雲雀かな

うきふとたむけしまぬ句のかれ
雨露に仕わ茶し液す梅干は
花咲ぬ山たあわやく巨燵の跡
當代で筆とりまうく蒲團て炉
當世つくあり文化行の風巾
手折てたかにおりましく藤の花
引去やむ花まつ遥か結ひ筆
去のうされ垣おとなしくおもしろし

夏部

ちるこにうつる月日や更衣

名残をしさもたゞ更衣

何程は海も錦とおりしこの人

葉まもとし錦よりのまゝや衣かえ

夏たつや衣桁にかゝる風情迄

舟[illegible]出して[illegible]や　かなしさに

かしは手もしらぬ皆にや　杜宇
あつくしき耳は神の〆に郭公
龍ある麻りも鏡あわてかなしれ
霞尾や待てゝの二川かなしさに
おかしき次三日空しき神ちる笛
遍照と乞ぬ川かなく　杜鵑
法師の尾も青参手にけふ
また走り揃る頭游風　蜀魂

けふ仏師も耳ぬ刻せずゆるさ
卯の花や名も遠くに称の旅人の夕ア
山とまた飛来龍生成てわかうちの都
灌仏や寺へ花見の神をとせ
おきさ白ひいとく青柳に
南天や菜のかしらる華のうへ
麦秋や風まと告とも卯の花がなき
麦蛙に懐けしなく　徒辺

竹の子や痩しさへまた名をたくまき
洲北かしこ子となりけり泉下中さ
余所にみるみそなはり舞鶴穂麦は
松乃手向てゆく秋の木下やみ
白雨に蝶乃羽よりゆかり印かの形
延ひてほとゝきすみしらぬ青田哉
居りけり棒も風乃吉苗蕢
こそ更科とのたまひ其袖柳の枝

いさつひり妬ともなさは不識の角
源氏なりけるかなしこ江戸や帛幟
結ひつ常く勤る江戸代の幟哉
義のさかいきふは落花よりしの紙
ハ百屋りとも名ぬりの婦く竹の哉
藤ゆふ甲や豆麻の草中くく
柳乃歯しは色ぬ六月の藤の角
六月かに松もとかやの何乃凡

本津りや閤ゝ布さ一の五月雨

笹のかけにあすくふかるゝ霧坂一の瀬

取付寮も窓し扶明の坂きつ那

骨折はさ細く本殺人の坂ありの那

かゝ中りけや葉とし菓子絶せしし

巻布孫つくのゝてかく乳葉哉

家の風しく唐る夜明けかゝるゝ

乳ふ蛍は川の源根蒲むしろ

忠盛りさしつくし尺達てしけるかも祇

葉と私子供や豆た行糸う里

夜のゆ布く晋新へしと蛍かわ

大将さ夏わく山ふへみいきかり

蛍ともとひるあてやおそわ虫

青梅り句ひしわゝはみ月せき

奉加帳留ぬ出して幸や事人こそわ

侍人とゝりさてはとしふ 氷鶏 撰

たかき屋乃御劔はおりは坂中村に
人の心さけも迷ひあれな
村中よもしつとき雨の桜桐のむ
袖のわかれや鳥乃新まくら
鮎売も人よおくるくまも那
草苅のとり帰りの祭留
涼しさは吹くるも梅しと年外
を中り寛右衛門しとし外

烏鷹さゝ様り如くの年行
射干（ひあふぎ）や露も朝りはうしおめて
芭蕉りも花し去年の混気（氣）
挑しぬ橋かり色さしみやかの川もき
池乃名も蓮も咲せく杜若
花石よ龍り形しそこのよつらき
撫百合り借もつき角は蝸牛
扇拒中り中く笠見あつされ

氷嫩乃開きは日数のりて景色
蝉は出てし葉よりとまれ涼の都
くつかりに夜風をまねく涼の姫
蕓薹乃芽くゝる暑さをこす涼の姿
其うしろ祖父と川で涼む家
まく乃さや針絹まとひ織川も人
何如の草鞋掛る志ら川乃里
宅二の雛ましく桃乃志節可哉

年玉は六方請ひうけたる乃都
菖蒲ふく老の住居や蝸牛
五月ひの牡丹は咲く百日紅
咲けりに絵蝶乃一期雨面月紅
初蝉乃耳まじ景の姫
世の夏の便宜開くる水宝
てんうりの化て和歌雲姿
にほひ乃花とおいはしのうさ哉

井戸掘の浮藻へ出るあつさ哉
簾入しをふしるさ行まわつきかな
子福者といふまてく坂屋の男ハ
我とらぬ蛍や帝ふ埒の一つ心
松りまく清きくる村々せみ声
蓮もちる蓮とてうるるぬみこわ哉
白雨や柳る大立りきたに目うけ
豆蔵やこえる祢れ翁しるに合す

出羽魚やかわ椅おる砂川　京
夕顔や月妙をゆつる去〻郎し
拙ふふやすゞしわつるり水場
夕ぐれや舟乃過ときまさし
川柳や芦まし傳さぬ香こ之
菖千淡香のり来や御旅川

秋之部

康色して左りまなかわき秋の旗
門書乃主り掃ふる一葉かな
三日月の雅く詠しつる一と葉哉
千葉ゟの庭もとしく桃も一葉哉
七夕やはかさあ薄月
星かつすゑみちや康の淺き

やせ牛し小車さへぬほし　逆
かさおきて牛や布幡の星迎　遠
二ことのは忘まて星にも向秋
叢出て父よふ孫や孫まつり
故乃もしぬ家わ道なわ孫まつり
聖ら果非わしや蓮華し風のは
松くわ火の孫まゐる洪世非好色の車
夏出非秋へとわ清く姥龍の車

榾絹や此ふ鼓のうちに耳とぬし
音寄いはえく流るゝ瀧の車
長閑もあれば禅して帆すわたり
桐乃葉とのえくれて流るゝ踊り船
盆非月みしく老ともゆる茄子哉
縁凡に汗のもてひとたとり紙
捨ゆる扇や一夜のはなたもと
出しく非く非や来す布帰く出もし　閣

垣のこ燈掃よせつゝやくゝ岸
たゝおわりや婉しき森琉待る州
從獄や秋の人去ぬ灯と雨よもる
生徒ちの掃まつくまし寺の庭
胡蝶や気しき夏しめて新場ま
蕣や林きのかしまりは織るす
牽牛花やすきさ过書の灯の光り
わさ作の花まゆふ鱼や阿りの縁

堰火焚手持や秋あるかうかこ
夕さんや坊の筆そえて蒔の色
ゆふぐれや萩乃うさと風至露黄
簾吹もし店ゝの京ふ句の晒ま里
川神の尾花を河わて女郎ふ
木掃除乃花も咲きま雨さき寺庭
塚乃囲池たし鴨の鶏ちと露乃難
野ゝ秋としもがれはてゝわ花すゝき哉

夜ならむ狭かに遊逢て庵ゆ比なれ
有とみぬ程は舟より隔りて北へゆく所
情遠く宿さ雲はとこれぬ世なれ
猶高や駿河の山と須賀へ（ ）と哉
稿書やこゝろのみつけ不破の関
いなほ一月や門は錦ふみつゝ清、
いな清田は海へ仰ぐ富士の雪
本すゞは引くさや流りしなる

一人ゆきて尋ね出しかゝりとわ
侘なくや夕日花おゝ杉乃末う
豆をゝ暮らしむやすみせて静み那
要ふ山をよして待つまてあり一人ゆ声
飛ゝの庵にし二軒清くぬ旅の子
翔にわし松しかくかたみさぬ心
すゝき滅い秋や木綿凡の音
旅人まこと角来て我達庵の声

芹焼や遠かりし回つてかすり振
彼岸して見むやおもしろき細
思ふなど人の皆ゆる月寒く雨
朝かにそしぬ影や小舟つき
わふむぬ柳さらわてらふの月
海の暮山しは秋ならふのつき
人麻呂もいりし詠ぬる宿ふさる
井とりも雉もさらへ泪わすふの月

笑濃わふく船てや手つてるの
読つきや君のくりし浮舟ふの月
芹せよしよぬくねてはりも舎めさ
大谷乃桃紙にわか月見の称
雨もはしる数りくる月見の雨
谷月や月見まてかかる北の山
兎の多り浮葉も掃ともふのる
芹もわさ花もはいけまえ十六夜

鄭薫と傳へられしも徳葵乃那
豈りと比謂り志付る能紋
不二と於て称し見つる諸事
諸見しく花の於秋乃比なる那
於る東の此節なる如く田舎まで
玄宗の上義して見えく田舎りに
其苗の惹なる花で好む菓多
二度乃月壽る離やふの菊

九月咲く月まで見えけしきふの色く
かさある天の様しもりて菊ふの葉
過書と一茂く乃ありし事
事りは花やなりそて茂く絶なる
菊比りや蝶と婦きぬ袖なりし
さ経の日て元と月の衣き海りと
きる新りけ面し逃し後のつき
茂りき細り如る黒ありと所のと

不破乃わ造芭蕉まくら旅の月
猿の子と兼いはしのちの月
華杖やうつ婦きたる北風吉お
上はみぬ月ひとつ惣あわ菌持
義生酒次しし時も手へ新車
秋乃笠月とちそて東山子ら車
鵜は北やうしし玉弓は投をてゐ
賣家北亜とおりはゑ蔦はかは

山吹とちらく小暮ことゑし絲きくを
片袖をそらぬかりまや松乃蔦
紅绵や虎に流るぬいふすしき
栃く縄や常みゆと椅り桐来
山くおらきれ河鳥えふみてゑきとなわ

冬部

十月はおんな乃雪や綿ほうし

赤くなしや兄弟に二人雲純法

爐の葉は称道のかゝちお神無く

霜気まてし月寒さ見えはいぬ哉

人まち川人待やうかもしれ

まけく来さからす日は照らは雨は

笛の声は、つゝにくくみちの月
吹しめ月を紺風の浪る彩を拾ふ
暮海く勝ちる松の嵐れにの声
うとん風へ浦乃娘か二声ゝけむ哉
本うしや浦へこうり諸人意
けむとはきこ帰りさわる落花もは
帰く文散らばさやる本は紫ふら那
一本乃桜の中に落葉ふら声

う忽下紅さぐし付まふる落葉哉
花繒乃住出ゝ子るおちらる
情花しさは蝶と逃て落葉らふ
墨本ら移おのち壊き花ち落哉
吉野らい落葉し桜らか言ふの声
順桃乃笛もよみなる経の声さ
志賀寺の庭や花本乃跡らる
蝶しと命たれ世中かつれち那

手折る蓮く説もあるなり又て有花
批るれしは牛蒡糀米の油海の花
筆は骨や柄乃始中末
柄しも筆ハ其等多く小筆材
雅細なる人めしして小筆の都
筆は先いとどの小筆の都
道しるしに拵さのかしきこ筆なる
也の花は茶あ新も途小枇杷の実

夏痩乃肥る法大きさの事
灸うとの中しくれ補さ黒き薬なる
痩凡呂は雨つけて食ぬ痩さ者
川鍬さ瓶治屋の鍬の内せるさ者
子肥して焼山子まけり次大根畑
湫藤乃中ちは大きなりや大根汁
蕪し也袖余ゆして酒あく大根乃都
菜は説しけり肥れ大根乃事

炭しは鰯前や鰤を塗りし焼ゝ
すゝしめや諸しゝ白さき豆腐焼
蕎麦切に拵へ来て猪の子これなれ
並みし浅漬しも或はゝ漬の事
菜ゑの七本の葉ののちを漬雑
帆をし瀬と鯖ぬや干物の縁飯
隠居家へ共にして菜や河豚汁
娘ともや本常をしくなり葱汁

女房より一枝申さ達ん柳深しのし
四五寸程の瀬戸物枝折立の事
あふきしと素て出給の宗様の様
素ひとの名ゝ人也りわの札の様
諸花を遣すの以ゑし柏卿より
婚より雪の雲こかし行手達の様
気恙なかしと栃ともに様ゝの礼
茶をかして子供の所ゝ御柳の邪

ぬくめすゝ筆りしもすゝ露手本
まつ露こと紛るゝ哉うもうら
まつ枕さやしくれの雲をちふらう
初雪やなし母ぬいふ北は庵をて
春律中あや源は可川つるに於
法摘し蝿縄乃小舟や小六月
湯(ほか)滝し雲か勇は声々十夜哉
茶もし顔の息乃あふや炭うる花

去年より紙衾くつるま寒子の年
今宵を毎年裏にして兄るゝかくれ哉
振袖の仕立てしてもぬかくれ哉
定めふかは奥もし竹うは花の木哉
知らし年まひ寒うる紙巾りの那
着経は神をのくれたし人の紀
孫乃子と始まつくれ日や蛭子講
花し紙くいるしやこ深さ松の雪

薺さく中に積しら鍬 雪の雀ハう那
鄰から拂くことふ那 ゆきの中
譲つき波ハおこしてけり 雪の竹
に仙やた夢のこ積る道ゆかれす
雪の橋雪ふゆきへかせを御掛
う川舟とはたよさへ落し歟の雪
埋火や関しら話の雨宝こそあれ
薺遠し酒屋へてつ搗き哉

蘇隠く月や七浦へかゑりしは那
抱籠出ふうしろさむき湯婆哉
自の秋も門に叩く鉢まて
瓢箪小路中に茶を呑しつ流
明け暮てふ錦をあわや流してき
きうめ紙枸子はかえて蘖くひ
鳧寺に門前にむれし冬籠哉
負しわ客を恋まし 薬くひ

西乃世も先ま急しなむ念佛

掛乞乃地獄の中やかんなふ川

牛の背しゆき走るや年の市

実しなく傾城もわとしのくれ

煤掃の日や嫁ゆふく誘し

湯乃禅縁の雪ぬれわ年佳也

鬼も宝人して走る年浪かく

米清弟く深川へ約し年の市

跡下まで蟹もあゆまぬ年の坂

六乃緒十しはしく来しのくれ

柊のいかさしや門豊角大師

鬼月ふ夜見えてやなむ念佛

旅書讃物部

四十歳乃元日に

ちよ乃名や磨しそこなふ鏡

年々江戸へ往来し給ひ

近く尾州に足とゞめ給ふさ

元日に

富士はうしろみこしは吾か国の雪乃秋

江戸しらく築さうし

旅人にきぬたをきかし隣の音

厳ある中しくま市北作ふ名

人のうさを深山本まして亡

市也のにぎはふ仏前出雨

拝しめし北市や市也乃夜あ立

志福寺に拝ひて池辺の納涼に

灯乃影やなとりなかるゝ川の竹

武州安仙寺にまうでゝ千葉に於

古墳をとふらふ

みしか夜や瓦にあまる月と星

日蓮尺寺にまうで

平城の梅しれきしけむしかりきに

江戸しらく初夏

荷をしてうきあまりや旅枕の人

隠者宗に斯須ひらく

すゝしくも浮世をのかれて夏木立
嘯菴一周忌八月九日
出しさのはふる哭菊の九日乃那
馳とふ頌ハとわて
静としなりて菴わくいろうか
謎星に頌しる年あわて
明霜や淮枕くし彿しか舷乃詠
遠山初雪斑わて

や祢萱にのつれし六郊の雪比山
巫根り奇飛めてろとゆれ去遥る
屋根いりし板葺ふうそ初ゆ毎
蓮二子七回忌二月七日毎に
こ乃七日乃菜まふ郷のかつりしき
巴鶏旅舟の儀ふね
便とは作とし子持の酒をあんかへかき
新蕉へましみかまて

冬こゝ近ぬ宿や常盤の喜多

三月ゝ日東へ旅立首途に

こしかたも百里や英彼旅にて詠

其夜嶋浜に泊りて

かりそめや寐ふも白餅にしも枕かな

六月十七日深川某の亭にて

初雪は不二は新堀り深かな

桜井氏老母八十年賀に

松ゝし千代椛や竹の千年かな

人乃七十賀に

王母から伝や桃のうまれの花

先二江戸へ御供かゝる儀あふに

甚う比此井日別も逢人も也中日に

麦阿剣髪はなに訪ふ

あふ/\もなし涼しき柳の梢かな

三月三日来人ありし節に

月てらす貝や汐干の置みやけ

旅中雨の日に

帋雛乃猿や盃羽り桜の花

五條坊は何ひく江戸人なり

僕竃中々の坊よ戯て

西行も松風きえん中なんつゝの下

江戸 初夏

花のえくさ又おもしろや旅衣

後藤氏五十賀よし

千代乃春や筆小かしてし麦林

江戸は立夏のは定地の人に

留別

麦の穂の睫とぬきてくわう神に

春る乃西下

筆小しても人とくらし身見哉

江戸よ立ら郊筑尾州如竹庵

琴平わたりて一夜宿かる
さてしく
萩は庭く萩さし川に人の従
四との神武帝は立しし甚の
へだし首か
暁の別れや縮の人にて候
菜見奥州行脚の餞として
白川をいてゆかは出る青柳し

庵元坊と申せし
橘や夢のふかさか人ましやせし
鳴海蝶羽七回忌に
手向る波よぬむりし峰のまつ
千賀氏正十賀して
花莱まつるを紀津して　裕
卯月してりのみ寺に於いて
六字まつ名聞くして五字乃あとはた

雛出一間　志に
常にいそしめるハ飛脚の人汗拭
式人乃手賀に
まうて百りの旅に梅小古暦
挿居武者にさへ人入道
消しとはいふ阿須加此ハ宝とわ
西月書小挿道る煙よ
うら気一さ遊や流水みちる草

知多郡櫻井村飯舎人奉納
新句飛鳥くく
花乃手向けに作りて挿の筆
師走百詠ありしに
梅墨ふ問ひ給ふ言葉や小松利
病中に書給ひしに
かくて又暮れ山に墨すりし川
無き中有有斎江戸人の修に

まれなるの好と渡る道大井川
仲秋の雨をりし
西乃月常に晴れ渡なからうる寺
亭雨夜よれなる悔よ
友をむ神楽すは　去れ秀
田家り住し幸須と
清貴の源道しまたの酒
蹄甫なりし磯の紫りて

江戸へいる餞
丈夫四方の志はとこしなへ
頼ふ取して旅に須生れ
花乃藤の名を別道の備無
其家出の
蓮乃矢餘りすみの前途乃船

賛物部

疱頭に絵に

疱瘡の餘有りし物をもてなさす

蚊帳に女の絵に

たぬ人に法の道の廣さ蚊帳哉

福禄寿に

めでたさは海一ツなかの中の福寿竹

梅り治郎兵衛よ

女かゝる繊くえしきれし柳ハの面

席上自画乃相贊り

淋郎よ筆はぬくゝてもかゝきさう那

程ハ乃画り

導陽は江や菱乃種煮酒ちやし

ハ重梅乃下に我宿は谷羽

見くえてる画り

我いは途梅とし谷羽の八重桜とく

慶は自切の画かり

多けしその谷は風き残きし花を記

日本境の浦かさはまする画よ

君その松煮かや別送はおとし字

大黒は画り

一千俵二よ又歩月はたるれ字

紅葉に松はまする我田山の

酉り

深ぬ松手墨やおし一つく龍田姫
大黒の大根と抱する酉よ

新蕎麦はいさゝや升出の土大根
妹乃町より月の酉

花つくし此自の花枝や卵の跡
本覺の酉り

要つかむやうきさ耳あわて出此哭

すあふひ手

賀茂川乃岸やながれて葵
道成寺譚入の酉り

弟ぬうつくし珠より角そなうらみ
川わたり布袋よ

鷺に似ぬ思ひ出は小雛乃気色かな
梅乃酉手

句いぬれし芸あるやぬ手かわり梅の笠

琵琶に女雄ありて西に
面ら梨としはにしるきて廉嗚呼
花茶に之書び此西に
世の見ゆるく松ちをや絵乃美人の
猿猴の月をふ西して何そ
揚州の鶴ありて来ぬて
幸出何か
月千延て花小篠し 猿の背

月有一所あり壺此苦ゝふ
女何ゝ西り
壺此也や此成しく 猿小舟
枯木に隠と移しと中わる
西し
思ふくとおもふてし淋しみ本壺
呉眠 女乃西り
竹と扇かつきて能清くて里

泉涌寺にて本加持さけ
つゝ画に
柊の門や奉加ともしらずあり
又同し画に
泉水にむかひ人声すみれ坊主かな
ふや錦の絵くし
坂道清ましみの花もしくて草の中
瓢箪ゝ中女の出て枝画に

山茶とかくれ川通る姫ぐるみ
不士見西行の画に
富士にむかひ秘りや笠をかゝけ給
虚無僧の画に
おめ給や秋の山さし吹く笛
雪中ゝ鐘の画に
西白ーゆくまゝに雪ぬり挖
猿実の画よー

かゝる猿猴古江乃山ともなりぬべき

女乃之書嘆乃画に

まく世にしれたるみすまゐれ女房等

幕に蝙蝠乃画あり

鳥なくぬ身にも情ありける様

福禄寿は画に

う世にかくれ法延してふかよる頭巾哉

布袋乃画あり

きふとこし勝まみしのや衣更

若松は庭は画

子ればれも庭よりつゐる小松哉

狸乃佛に化ける画に

蚊きえたり佛のむ狸人ま松哉

王昭君乃画あり

誰も雅ぬ目にはれ草や美人草

貫之蟻通の画あり

雨乃うちに飛しや笠見ん清水乃利
磯邊小貝をひろふ硯乃みなみ
ちゐくわと雀と聞ゆる友千鳥
蓮广乃縁に
元紫のりの涼しや暮れは九よう也
亦おかしく
姉うかれしみの無き磯ふときりに
東乃西り

何乃花さくあらし井りもみ乞比か
銀乃ながきて西に
寒念佛至りし遥く佳なり
鐘楼乃西り
下居と里も稲も出せる大江山
沫をしきり
瓢箪に蘇ちおゆへを祈るゝ
汐乃嵐ふ西り

長生の翁や婦らしき鶴なかりし
青瓢し
祈なくきゆるれてとみよ青婦らしく
蝉丸琵琶はなく画よ
見ぬ秋はあしき楼の一ぷ哉

有支子撰

二編

春部

半掃菴也有著

御宇すなはち源に浪かに御代の春
たかせも己れ雲をおしいて鏡磨
薺菜にむかふや浮世の慾とこへ
隠居もその帰に秋と年の明
津きん取佛ことしたち年の朝

恵方棚氣にかゝりしかられ爺里
まつや若菜売れ日ゆく路に結し
摘溜しぬるやうら若菜とぞいふお
双葉手をもやし咲や梅乃花
芽柳をとらまき草かわ梅のむ
世をしのんでぬ盗んつ人の植相と
小松乃世をしのんの若やしるれあらん
八重桜くの梅とまくらし　春の雪

紅梅やいそらぬ春ぞ腰もせまで
淋しさや多ゝしら摘し足袋行し
鶯や耳よりなる淋しさぬ
うぐひすや古かりぬ方響
鶯や名たち雀より上り帰
老乃腰摘ましたうを蕪つ那
公家の手小豆出し百子の日哉
雲とわし門や本郷の人通り

猫多村りし出きこてい梅と梅のふ
宿まれの下結の謡あらむ鬼の花
矢場こやうさ竹机なし梅花花
うくひすの書散あそし世見れ花
梅乃散るあたりや炭の市と縁
世見ん咲や大鉢にけるる垣大維
開帳の札もへ梅薫けりわかの郡
笠乃例しるき鳥丸ありてなし

笠あらき咲るあんきを青色の雨
わり竹や背色こそきりうる麦畑
若草やとふなくひとしとゆえるる
濡ねしも臭衣脱けわ春れ雨
絹乃系松しまかうて垂の郡
か滅して去つもちぬ柳の郡
とふ咲く鬼こゆと青い出ぬ柳ハ
梅きこと系を恵てさある庭かうきの雨

屋原より雨とおひと柳の雨
山茶花を覆て有りて梅への那
山遠く雨をちて近き露への雨
光の月やこぼるゝ涼しく笹の露
池より蛙の涼やむかふ清き
やまさ甚の月 堤尾清有て秋の月
洗濯りしも絹や先てお作る月
翌日の雲を北しくなり晴て秋の空

茶乃花や揚くれる人かをすゝ遠
無くしみ遠く京を見えぬ蕨れ
秋花にれ鐘を含てつゝ田とちれ
揚るさえ路をさて請をぬ田うちれ
売捨て出るや菜のふれ田かい
茶乃若や更りかなしれて秋次
黄田みとおゆくさ涼く田螺之声
沈ゝ淋田り埋てしとよの堤の那

深川世を分住なる陸の角
童子に取りて頭さ子ぞ慈の郁
鉄炮の後しづかなる雛の声
深草や節にかはりて雛子乃[illegible]
出代や人うきうきと九二日身
出代や花見て方小川人出て行
出代や酒井とめよの水前す
出代や菜つみて酒井乳母一人

初午や千種の常乃ゐるさ外し
涅槃会や是寿むくして一度見た生涯達
山寺乃春や佛のかげ仙華
日頃うつつく新に螢や土筆
寿細工あれ不形を雛乃上塗り礼
横しむる新活母なし兵雛
蛤を葉尾と吐無き汐干哉
名をを呼つゝ口に紅ちぢむく桃の花

余所に汐干や勢田の蜆取
浅漁とても出て雛乃花はなこ
三月色蒜とし花の節供の市
帆かけしらすあるゝ風吹汐干哉
花曇の日や旅らし都遷し首
雌雄も出す数や雛あら鉢
お家作りも注ゝ子ある雛合
名さきの戸ゝと係ふ掻名残花句ハ

暮らせとし上段婦くとも風巾
何所へ落て来る野におれ巾
祖父の目下ざる珍客なる風巾
何日も塩くれて掃くこそ桜の事
雨乃手にもと酔人や山ごもり
無常しらる縄しれきてある沢ゞハ
拾ゝ縄る見中弟の恵や山さくら
一所ふうし中ます人やおもてさくら

給絲ふもとにせかかりやおしさくて
酒なうる小傳らし人あり來る邑さ多旅
くさめしてみえそふうるうら雀の声
骨おもく旅路をわするのみ雀可憐
二川嶋くあやつくみえ出寺なとあり我
見合てとみえ所ぬさとしもひとわかれ
山吹やゆきもしさくらき比丘尼寺
実のみなりし枝曲ちらして梨子の花

折る人に秋の欲れし梨子の花
あすしの色に延しく旅人をおし
香久山は畝もとの二ほ躑躅多
映山紅さく苔やきえてれおかる所
越くまや一寸先そ木下蔭と
引去や遙る門ゆえ雲もなし

夏部

芳野をとみすにてもしハ袷なれ
やよひ抜ぬ清されの綿やむかしく
花已りも薪とのうし紀袷の車
麦帖乃ち川日毬枇杷の一ちふ多
耳ゝ魚をハ可川廉ゐ通りやけふ
松か宮耳楫ふありてあとくさしに

花乃幕破風にも示されて牡丹
子規馬の耳ふれけりほとゝきす
聞かぬ年ありと爺もおもふ哉
いく川をも音羽して川音の契り
郭公一声落て捨て那千里
龍田川明けし梢に啼かしきす
寺も過ぎし人の問ふことし郭公
旅寝してすゞや二夜めのおとゝきす

氷室守る小屋しらせける郭公
短夜や笙ほのくと鳴く明の鐘
卯の花や卯月晴の名に立ちて
みじか夜や桐に嵐の明のこれ
蝶々も来て乳に吸ふや花清き
紅さくら生まれし母は木下風
まつ虫しみじみ鳴くや青嵐
郭公門入風の音する田植の車

刈るときに春毎勝と有早苗取
小傍余所の思へし偲早苗取
筆小注連達る禄道の棒の事
旬や道人小縄の筆ふいかし
重隠乃小城は貴子蛍なりの能
嫐すゑと清暑手もおもふ蛍なれ
捨てし身は唆せきんとて捨たる
蛍もこちへ遠る鄰のかまりか

わり扇の捨なりへなよる太工なれ
あしゆと蛍にくまちて捨たりは
辻書乃家威を入しかなりの能
憎ひ蛍とけし蛍ほとほつるゝ合
橋乃下ちきまてゝ通る蛍の事
本の川とし花は雨夜の蛍の紙
取もふしと口ゆへおもて蛍の帰
続しまそ年もて蛍ほまてゝにけるは

豆ゑくしはきてしほしもいまよ蛍の飛
待わひ人のまねしける謡乃の雛哉
篤か名河の遣か涼し久りひかし作
藻沈花や足とし根なるかき池の石
名ひいりとし剃らし節り御蔵の苗
千をほひの扇こそ節しよ嵐の那
剃られた佛へ上下節しのゑ風
笹は涼える遁遣し風して芥子の苗

清ある乃穂なわて夜発被の那
門の夏れし皆戸は遣し袖花子
ぞく中のまみ野をに袖於子
宮あらへの涼遣し見月との袖花子
夕されの蝶握りこその牡丹の那
胸を風る人はゆるや百合の苗
菊川におくわしと四めし金針花
畑に帰く来んこや三夏の都鳥

なとしみて鵜のわたしぞや諌鼓鳥
修理乃中まて平なりしかせこ鳥
ほとし無小様そ嘆きぬ主孤貴
蝉よわるさき見えもぬける様の声
風鈴乃音よりゆかりや青ちとせ
筆ふるて文花茂く栗乃花供る
家ちり川よりも芭と伊それぬ様の声
影法師は幸りとも建る幟の那

幟とゝし作のよしみや無ちまゝさ
子ゝは投ぬ世よりし薮まとのあのまかな
山ゝ路のほ町まてハ鳴る川幟の声
の菜は見え河声く涼しき青露
そよひやむく一羽まて行くる子
それ婦りし人手伊せ旅雀
五月雨や八日くはなとぬらる
さこたまちや背戸小鰹乃投小舟

男とわ女いもりしきつきは遠
夏草や家一夜かりし虫乃声
傘に雨みえけり　蝸牛
涼しく打くく縁に浮ぬ青田哉
葛水やすゝし塩虫菓子夏しける
昼顔や葵草こそ行いつかしき
夕顔や雀月乃人の夫おもれ
松ふ白や枕灯消る薬師堂

物かくぬ人雲の霞る鳥思ふ哉
木蔭瀬く月のえる嵐すぎ扇かな
そこの書て尻に家扨ぬ金扇哉
都る秋しいみ小持てなる団扇
雪隠に去年あかり秋かぜ哉
此妻も屋なきゆまつき清水哉
古雨干袖かし出すはすもと　鷄
渡りしと清草の下ゆく清水哉

抱籠や抱ゆく小涼みし朴の陰
實手しは諸侯も帯かん太
十八代土用茶かして小角豆哉
物や此声にその花を累ぬる角
帷子の背中離れすくこ那
肥えを見えたるあけさ可歌
大名冬日当城通る累可南
傾城の汗の弟誠売るあらしか私

牛こと留しなき草刈の累ぬ秋
涼しさは新里過るや狗め第る
雪踏て来て新累し富士詣
履や吐きし好みくうつろの秋
氷室しこ三千吹かえ思え御旅哉

秌部

秋きつや嚔倚くれたる風
立秋の肩小脇せやゆくしくわ
秋来ぬと閨や書屋の塵のおと
暁しおし霧は跡よりくくさ野の秋
折る摘ときふうし嬉そ百日紅
あさくもや吾羅し桐の枕よ柴

菊ありき咲かぬ宿や今朝乃秋

秋なまや木ハらくめらすの色

絶子らし筭一節りく一葉の聲

篠入り延ちなくる葉の邦

出くひとなきおもを拾ひし一葉哉

牛牽て急竹川やての川

宮しや今宵天の河乃字歟萬

七夕や萬りくう總も夜明りく

星乃二て泳八日あしくまおもなし

静や諸まつく廊なし池朔

衛待くもうさ借まし中や一夜河

月小霧りし道まつく嫁入早

星乃庭まうさ住途すや明のそら

蕣枡や不順し帳りし置なし

送り火や別まてく人小なき遠あ秋

大黒の窓しい棚や玉祭李

棚経ゆかしく減るや燈乃影
縁影乃ことの出あれておける蛾おかし
人乃子さへ不手に子さうるおもしろか
畑も乃様くくみなるかとわず
作ふ影や郡し来て秋ふかまる
曲し庭る花こと磨て気乃あら
覚去して招らかぬ扇一筋
筆すさと紅う佳もてさ恒根れ

蕣乃毎りし朱の紫黄さまざま
朝の月君さやかに咲きたり明の鏡
胡影やいかにとしさあらし元一対
あさきりかや白扇と椽小窓のまし
牽牛の佳や浅の二つとまき
深手ぞ称し新まいぬ西瓜盛
稲妻や夜梯の声も深川てみる
小車やかにかり小牛の鳴おり

乳子して風の　葉乃花
鬼灯は妻しめちりや唐からし
雁としらぬ玉葉とちりくかす紀
柳子めくら尸や豊田は垂小ぼり
弁平あ中る互降とあ中雁の下来
雛路や遊り花りしみあつて作
赤く新く白むうかかわ雛路花
雛頭千牛のか丸照らら事

霊さかきし米実切しるち郎らる
鬼婦や娘くさ婦とし門徒下う
頃後むし藤書ちし奴芭蕉の那
啄木や庭ゑしいとしせる蔦乃門
掃滴乃め尖や薊乃花さかわ
虫乃後人むし機織る夜ゑる非
行婦の花しる坂寸ら秋ゑる非
女郎花那らきつ妻小白眼ず達ん

落る人拾ひかゝるあはれ哉一し

追ゝけの宿ほ来ゆ柚味噌かな

桐の葉もとも掃かれて落る月夜かな

芋売る銭しもしてかる月見かな

霞よりしれ流れ川きけ節ふ乃森

名月や闇より雲あの端

霧乃秋や花おもはくきぶのこと

嫉拾ひや芋売ゝ駅さふのこと

名もなや雲をと露洩総たゝ節

庭球関子若は月見乃秋明かな

十六夜や足して織の星乃中

いさよひの芋や十日の菜乃就

世をもの足袋の袖霜白し菊乃納

小袖着れ日もやや蝶しわし細

庭もしかふゆる鬚若あわふの菊

武く比けや似ふとして石菜の時かな

栗柄坂に坂とし侍りす菓北嶺
掃部の山と南有非菓一乃邦
花郷めでて人はさして妻山子哉
仲国の平小郡广あらぬ孫の南
綴取乃金や蜻蛉の一川
足ととの豆盗何乃しま妻山子の岳
月て妻山子之所とし二頭とし雪見哉
畑めしの去りめ南のはかし哉

庵てお我立気会をてる手てし哉
鳥追光錦をまとめてかゝし哉
蚊屋を張て巨縫を渋き后の月
手のひら錯の宮は李々のちれとし
新法非小細は金近南の後北つき
九以のは久しに懸て北らの月
二子里を栗せて后乃月
稲乃尾と免あしわ栄様の子

後家月出も無して一人の影
豆ひくや子乃日の節りし床のゝ
うし枯や小町か斉れ女郎花
故郷教れ詠舞て給の葉
明れ如し哉被きて紙衣の名遊し
旅人のそゝなる饗棉の車
草枯や借さしとは月の連してす
着れてるも人小すゑあね蘭ゝのね

行秋や粽ふくしほと茄子ゝわ
秋風の吹けハ白髪尾花う車
中ゝ嫁や雨おしゝうる月の夕
安我れ名遣ひ尾ゝもなくして女郎花
朝秋や霜をふちぬ小境杭
行秋や本多れ棉小曳見返て錺

冬部

河越乃城ともかくぬ時雨ハ申
道連乃義理ニ濡るゝ時雨かな
傘持て出迎てもまたぬ夫れこそ扱
お傘小竹袖川ゝ浪しくれ哉
一本ゑ深く編場のたく袴可面
衣云度の後ゑて下結ゝく時雨哉

手ふ附笠さゝ道祖飛もこれか形
二之枝絵る見て晴やかに書く我
出二千三生綿は押しく小六月
毎れもよく見ぬ小ある乃角
我れふの小徴く筆持つ小春哉
神送り様豆にお供乃数しるし
柏手さへうれしき森や神有月
風や風にある名の呼仕迄

木枯しに吹きつくして小春哉
木の葉ちりや一日胡馬を嘶かせ
林間に風呂たくもその落葉哉
二地乃木は節もて掃落葉の形
大丈しともあらぬ木末におちた哉
胡ゝれ湯瓶にし上る落葉の那
今掃て在るあとに海へし落た哉
掃くれとの庭の中しかはいおちもしの弱

木小置くなるより多くの落葉かな
椽りしは掃てみるも落葉の車
行むかく流る壁り居おち葉かれ
草川の落葉かし跡に枯野なれ
五六羽乃鶏小わ森る道野なる
永仙も庭みなしきて枯野の車
木くも跡かうしみ高き道と十夜秋
山寺多く、旅人日枕十夜可南

根深葉るさてみえ冬ことわ
付取めとおし恩わ帰へるる
ことゝこにくとてか通りきな
納豆や蕪と中々にわきれ
咲るくまは減くするる帰り路
落葉留わりし行く雪の道芭
其ころさ葉て取るもせ大根引
家を踏せ世流わ幸くし大根引

胡蘿蔔

人参も竹より赤し　大根引

蕎麦切の目や一本の大根　包丈

折ならしと家の背打て大根引

茄くり枯野とこつや大根ひき

山家は海あさいこ川魚武者ハぬぬ

ぬきもてて京へつとし田舎は大根引

茶乃花や足もとうす寺の細さしひ

水仙やろん遠く菊のうしろ　紀

水仙や寒さに梅をうしろ　揃

水仙や梅の川人をもて津せすか

水仙や一本に紙八幅より霜の光

蕗は白毛し柿くうそくなく柿の菌

古糸の緒くさいに川華の菌

本多の柚子しそく帰りや鄭鶉

田楽の夫婦ふの家やみそさすね

池もみそしうさぬるに鷺の中とわ

釣針君智恵小かしこぬ海亀ゟ
足まして冬庭なるまや置火燵
一日九炭拾滅くす大樋の那
子を抱く乳母ゟ軒のこてこ川哉
筆足傭を書人たへて巨椎哉
埋火や白ふ寒る味噌かとり
似合ぬしやうしいさましき衣哉
人来るを肩て見んとする帛衣の那

勘当ともぬ子を見送る紙衣哉
麻しきは旅りきりて舟衣は
伊勢躰の席より持まゐる頭巾哉
剃しく楽おしはかとる頭巾哉
又来るも頭巾しくや念仏講
着しけるを先くさえてる湯婆哉
垢離や酒下さく稲の旅
去年きし九年かしてを知る東山子哉

朧八や何故小さゝめる月にあはれ
積るみ雁もてゆく雪に挟奥川
寒けさもしも着まさぬ鶴の汀中哉
鶴遊の五十城しける朝の那
六月は忘なく忘れるさ舟はるの那
胡めしに三度鼻のみもあさき船
萩にれて雪源氏女ほあさきな
純に黄まさる白妙岸にかはめあさき

孫晨とし　一抱てさしも哉
那方の来く門新にしても楽窓
絵しさへしも華に深さへのまに
あら垢離無みしく門くの水の東
飛鳥川にあとさの小しみの雑
枝く老の前をとしくこかの哉
漏み事としくさくしる九雪哉
もし津雲やまかはみ小消ぬり

雪の夜や語つく人をあま遣いやり

松またしハ帛燭として枕雪

雪れ日や向ふよこ遣るくすり子

拾こゝれ瓢して出て行詠ゆくき（噴嚏　又嚏）

社路のくれ鬼小さわく衛くれ

業平と何そとい四もしゆ志るの声

冬とまた遊ひ中かはかきの世をあ

盃京かり月お扇乃事や雪乃毒

指おりし梅を折りし年忘

節季候乃孫聞て行編尸りれ

音きく風出お耳小乙て帝屏の音

年乃波低おかく渡る歩潮あわ

行年や尾とそこ小鶴鶴

煤掃や飽出る迄しつる冬籠

前書讃物部

酉乃五月絵の華紙出し
同さして之入華稿出しほしく成す
蕉旦三年世紀逝し　五十首
同年おろ古現世の紅や屠蘇代
六十の春三年むれ謝めの
筆紙出る前書あわ

華山か春ハ仇名やよ六十

田家に隠居れ玉ひける歳暮に

田作りハこその夢ハ九年の暮

娘におくれし頃

蓑虫と父とこひしと泣ねを

同しく百日に

一日の花し悔ます百日紅

明日秋蝶ありて

哀さ世や麻れ茶れ出みしり

同しく墓に詣く

通ふ毎の袋そ露こぼれる小袖

人の悼に

散るよりも有ぬ欅の哀の筆

百松の新宅へおくる

涼しさやましこ五おわて涌唐

成瀬氏六十賀に

木のこもと君か齢のいくちあまた

有舟来行の浅瀬に

目を借さしも富士越ゆる具蛙か那

如舟三十三回忌に句をなきて

昔誰人年の峠白を継しおきます

笠寺に詣

寺乃名に隠れて笠を田植とて

松本四時園六十賀に

そのむかしめて代小椀の桜本の

田舎の人日市中乃世わりに

ともふる人さへ出来あまた

巨燵りし手足出して摘む若菜哉

年の賀人の祝ひに応ずる四題

其一竹によする

若竹や年々に千代を重ね送さへ

其二梅によする

梅久し王母か桃ともあらそはん

其三　菊をよめる

千代ばかり中に小道あり菊畑

其四　菊に寄る

万年ともさしそへて菊の宿

中の武州より失名る時に

二句

風巾は武蔵くはりなき風の便哉

桃ちらぬ梅さへ人おもふ世はいつも年

安十郎といへる者か

高瀬舟画ける盃に句は

請て其の名を句中に

かくる

舟の名とみしらしくの月いかに

人は七十の賀に

千代とし津くの松おや国につくし

人乃恥よよわて絶る三題

河海は風森の櫻

裕めらわりての森はさらしり那

鳴海の山吹

なるみとは廷詠山吹の花もなわ

木曽ハ紅葉

木曽蕎麦小割速く早し初紅葉

人ハ六十ハ賀ゆ

走よりけて君り一朔ハ髪去し

深山より浪ろかぶ絶ろるを

謝して

杉那し谷の團扇恥し浪ろきり

九月に武州よ手上屋さ奈

玄き泥

菓子し毛人の夏さよく先咲如

いまさらし逢さる濃湯の人より

句はおくりこしに

粟乃穂やあたゝかれつゝ　國鄰

蓮二房九七回忌に

鳥となけ柳をしきりにちらし

人乃三回忌小

哀ア三度の花郷みとし　来す

信州飯田の人ニ請まれて

雪国乃人小恥し霜　[illegible]庵

鴻の巣乃梅乃小請まれて

鴻乃巣の人より壺蔭の床恥かし

始てのはじめ失なる人小逝去乃

句をこひまれて

散る茶あの無く乱て茶法の花

海宇の新宅ニ請はれて

垣低し山て雅や・橋乃柱となる

岐山乃人へ云送る

藪にもうくひす種に出て小鮎 鮓に
霧柳の父は表は吊に
竹下露し翁は行るかをうれ
六林東行は道る
一年しにて早来志はならかうら那
海老庵に待る入菴の御法
佐々木に下る三帰の山りと
風に強し古寺は樹法り

隠者は市中の都中し
遠しとて玄斎も有
庵訪ひ松は菜を道の志る趣らし
雪の日三州の畏由に訪まて
該作らるを城せんあす達雪の垂
武陽の巴雛訪ひ来るらる紙
一葉中に名人をあ
こえて明し雪の思ひよりて城風の一年は

其次の日

松語達ひとよはなかに麦の秋

千島庵七月十四日夕がたに

立ひ侍る

来る中に往く縁かれし里の雲

六く庵十七回忌に手向

雅しや夢青き手向の句なる枝

芭蕉忌に

きふ乃佛知らや粟津の大根引

年く病く枕上の口号

死なる今は世に枯るゝ草の連

八月廿日北仙骨東行に餞す

有中月乃ありてや旅の人哀 笠

生あるもの小死ありまた生かへる

その何を死を雅人の子あま

あらし。

野辺遠ミあかつき袂にそ見えぬ露ハ置そふ我

讃物部

柿本小将の絵に讃す

拂れしくしと多の樹ほのかにうすき

小塩原の画に

世の月も霞ミ月をみるす小松原

篇の画とも

華も月もゝくらふ一世の中の篇の風

猿廻しの画に

萬四の焼飯袖に猿廻し

其の鯛を肩にかつぎたる画に

猿鯛大こくのまつりかな

三夕の絵かゝく讃せしに

浦也の画を頼く

浦寂し胡蝶ともなしあさきの花

蝙蝠のゝる花に図に

蝙蝠や家一羽あるは烏の紛れ

牡丹花の牛に乗る画に

乗る人の名ましき違ひや黒牡丹

瓢下し虫の図に

駒の出る瓢かと啼やくつわ虫

秋の柄に菊咲れける画よ

菜遊ぬ鍬入達抜めよいみ菜畑
　　鳥は狩ねゐ留る節に
末秋
竜く干りと阿るは移り行て山鳥
　　　瓢再蜻蛉のとまりかな
　画くし
夕影や蝶のとまるさくらのとまり哉
　　麻しる牛に人かよう眠る
　　絵女

夢耳夏は冬に涼しき夏哉
　　生部屋よ蚊遣りは画よ
唱ひおす一把を手のうりかな
　　福寿竹は画小
積善の明しやさゝて福寿草
　　六哥仙の図し
月耳しもつや中・上・ことを女郎花
　　萩の・画耳

足のおもく赤地のきぬ繡まで踊て跡

菜の画に

蝶ハ吸ひ鼻ハ刺す香や菜の花

雪に傘さして行人の図よ

雪に傘梅見帰りか酒屋へり

不二乃嶽に桜あるに

白ふれと花ともに隠りて富士の雪

大黒の絵に

帰花さる跡清きもてなし帰哉

不二乃画に

白しまし若り不断の富士に宗

筆に蝸牛乃遠ふ画

盗人の抓むあとあり手に汚れり

庵室に胡蝶の画よ

胡蝶球絵にかくるやあふきの店

傾城の絵とりある画に

蝶〱と飛れ流乃身を知らぬ哉

定家卿ゆかりの画

雪にて遣清阿しにうつる笠なり

布袋の琵琶ほ浮く画に

霜乃後白ふや枇杷のうつし絵

垣下小角豆乃画上

茄子しる手て見し勝の小角豆摘

蓮池に蟹乃画上

横に行者や蓮池小鈍かりく

凡諸上燕乃画に

風鈴に一声内の燕つ雨

雪に柳の画上

そゝしし鷺乃飛るゝと知らず雪乃中

思ひしつる傘に池牛比らふ

是水

さみだれの傍や家撥しの堀中

柳に馬の絵に

胡馬とく北やまて嘶れ凡

松に海をまてる西

母しやしく懐きとし去に故郷

竹に蛙の巣はまてる西

七賢乃跡とらの巣や霧波帝

柳に牛の西に

牛乃心垂にて繋ハ角もなし

摺繪に梅は入つる西に

摺子本れ枝きい河ニ見て梅のもれ

又同し墨はさて人の恥かし

いづるゝみ

うくもあの摺繪し世人せまめれ

三度同し繪に

梅乃花よしや來ぬ何世るとれ

西行の柳陰に草鞋の紐徒

於小曇に

むかふの浅瀬のかゝり水ハ草鞋に

蛙の飛ひ付きて

猿なつくとする画に

見付し、又蛙に勝のなき事は

猩々の甕にはなれて浅は

飲干絵に

款有し桃さして甕乃湖千哉

華にあつて山岩にまつる

画に

渕明か岩や路巾の千──灬

櫻に謡乃画に

謡はきや花散しぬ手ほ濃ま

木陰に唐人のふ小女子る

写之──。。

高湖甚之七月元旦にて書下 閣

瓢く弱のこゐる西よ
出まく入れよ月毛の弱みは
女の本ゝはおとく堪と遊ふ柄
きてゐる西
豆きゐれまく示すく憾の搖悟し
傾城の西か
あきま遊
挿をゝそれ忍ひぬ風きわ
女乃みくくおゐ男小

静さしいしは下界きみのもし
帆畑の西か
家まてし西帆の姫ほ畔一章

餘日追加

辛酉の秋洛西光明寺へ
詣往を逢甲乃吟
二日小雨逢して三日を
當津より旅寐す
大佛を望日を見る月小三日の月
布川山

布引乃山や錦をかさねむらす
此日九秋ハ開かれし萩屋と
いへる宿に泊るも今まは
草津の菊屋といへるに
泊りて
萩屋から菊屋へと旅の艸まくら
瀬田の橋舟はにこえてわたる
明ぬ萩の長さをこへつや瀬田の橋

義仲寺にて芭蕉翁の墓に
詣し
時雨來て蓑も草津のきりぎす
大津
大津絵の鬼と名に机裏し
玉章地蔵
玉章の地蔵や大津の一ノの巷
清閑寺

籾摺乃哥ハ仲山杉やむし

清水奉納

ことねさしハ額とし千種のいくハ枚

本願寺

郡ら乃庭り田のんとて出ハし去そ

鴻京出口ハ柿

おしめとし数り侍つゝるし柿乃那

六條より大立義種としいへる

とこの宿りりて泊る

其比樋口に枕を結し武寺をす

西山にて

蓮生り孫力五小あはれ遂る事

松乃尾

嫁風の杏ハ尾そうし尾花に声

西行櫻。

西行といふ紅葉下そ此り布て

嵐山

見るは花に初あらし山花もなし

桂川

追ひ上る鮎の栖やかつら川

野之

のしまや謡ひゆかし虫の声

小倉山休庵の亭

あさことしまし霧に添ふる時雨哉

愛宕

松華をまつ嗅く鼻の太郎坊

かりけや秋の来にしまりたる

あさし畔

化野

あだしのし跡や夕ア比人に胡の香

北野

松梅やえくみなるつき満つる

加茂

啼せみや小川にと将小瀬連々手

黒木賣・

男の吹て見たる程しも末に女郎花

鞍馬

鳥もし啼声馬に鞍する山寺哉

祇王寺

祇王寺に峰の后は鐘より左の奥

寂光院

見捨萩や女院の御手の涅槃経

矢背に旅寝して広沢

聲は聞

身は尾花来ても旅寝の床の声

比叡山は雖も日々の風情

西山の冬まつ出ぬ比や松の声

山王

猿もし慈悲しれや赤き猿の顔

辛崎、小萩の咲けば思ふ
秋萩小磯志賀の浦にも秋きぬ
石山
雨にぬるゝ鐘ならく
八つの名に流れし石山寺秋の月
鏡山
鏡山曇りなき世の旅夜つき
醒が井
醒が井清水や扇の影さし

寝もの語
ことゝ一つ家に美濃近江
不破
荒れはてし跡ならぬ不破の関
稲葉山
守る名も高き山すら知るや稲葉山
江戸吏郷六条此句六林
よもき丸小かりて候す

山廓初暾

気ふ甲小家ある山乃朝日影

鄰舎喜翁

悪やうれし聲する鄰

青山南薫

悠然とみる山ほとし南乃隣

墻上植樹

垣間見乃鼻小木犀匂ひ節季

西窓織月

三日月ほのかる旅窓の隙れ

芙蓉晴雪

上ゐ季の情くし新らし不二の雪

蓑月輯

山廓初輓集目録

[illegible]

[illegible]

部 合 喜 會

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

三編

春部

半掃庵也有著

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

三編

半掃庵也有著

春部

門くゝる松や世しれる友ならわ

嘸かし霞の起きて来て初日哉

有栖川ゆかしく庵の恵方ゝ車

男しも雲志るゝ七くさの菜摘み

宝蔵くゝ扶けぬ暮しなかりけり摘

松ともやみの梅の詠や其外つと
鶯御とや味噌をと持参れ来り那
如月きれぬ日の畑の梅の花
春なまし梅一人をとみ世清めの友に
家乃春眠後を行とは句ひ節は
薗ヶ村は鼻と道はこは花の花
茶うしい節ね梅の梅の雨の那
勝機く折りし咲かれ世清めの花

先は鶯しと垣や梅の梅の花
那りし咲く世清め人出て子供の
蝶にも日りとりしめし赤し梅の花
梅の香や梅の節くたれ冬に
うつし春梅見くまて開ける初春の花
鶯や初の花鶯し梅晴し
鶯や又の梅の摺値節めれ手ん梅
うつし梅の七州十二ふかさの鏡

川からゝなし猪名野長乃竹
濡くる舟墨子と流ぬ柳の舟
来りくる舟停泊しらぬき柵の舟
尼崎に割おしつる中なさり那
おし通ぬ汲今長しく金兆気のなさりか
帆しつ通しく走ありふれたる舞心
松きれひくんなりし流らものさりか
二丁出しく見くる家丁鉢西尻の舟

なほいとのくあくりのつ舟悲の舟
墓場しは様とみえす滝とさされ
ゑ代紙のせとわり楠やちりの様
大様了悲湊よりて走し勝浜さ
蟠塩乃もの降し花やおかるつき
山寺鉢譚とうかく松かる月
兎しくきりと瀬治の奥なくや縦さ
浦る厚物まくんしまおほくつき

三日月の頃やゝ妻乃紐とけ
又も日もよし逢ふかなや田かへし雨
満し世の手もとしぬ料理や田植笠
菜漬売の雨あかりの跡しけし硝子代酒
なの花の川淵へ恥しいしかりし雨
濡出よつ人は菊きまくなりし蛙
酒池や去年の蔵蘂に慊うとし川
椿あろし須戸のみ寄やなかし　堤

四五升乃みまとも終らくかたり哉
德そのくねもの荷をまとめんゝの冊
語ゝ機ては二わてはりしぬ惑ゝ那
萬葉野はよけ新しくゝくく案摘は
足も継之本須花の田うちかれ
出代やかる新暑の宗け人諺
出代や春の名ある新毎年人
杯もん会の徒也や幸の夕樽

花にちる世を出かけて涅槃かな
下手の絵は淡路川涼の祢に見る角
難く飛る絹にさくら祢に見ん像
鼓打なりし呼来く帰ん祢に世以
初午や去年の絵馬も古き侍
立行に華やとれ駒雛
看経に扉の隙し雛舞
雨にかふくし塚に拾ふ貝る汐干かな

老眼鏡にはなれしる汐干かな
猟師ともさすか寄る湖干哉
山寺の御佛およそ常し哉
軍場に世こりしかはや木の花咲
猫の恋庭に御中みて椽の下
猫恋恋橋本押して逢を遂
出代りやまてを逢ひとけつ鳴恋
松しも世話かけ踏子やいつの伊勢

蚊帳の月とまゐりけり　麿

蝶とかなし乞食と涼しや花盛り

短夜のゆくまとさくらの那

世の掃除の日は涼しかりつる比かな

苔西の方むかふ花見ともわすれめ

掃く人の来る人もはなしけり　我

若葉して端居の涼しさかな

草の中の人の眼をさましけり　若乃紀

ますかがみみなやさらさら

山吹やかれがれと晴れ　雨蛙

鳥の巣にはしまる手のかゝし哉

雛子一羽見えけり畑の中くさ見ゆる

かはほりのこるる艾も道の那

抜くまやたそかれ（黄昏）の花のあかり

掃除すり蝶のあとに来るなかな

夏部

卯月　初ほとゝきす　袷　卯
わたぬき　帽子はなれ人はなや　更衣
紋所かへる庭の花あらため　更
羽織脱ぎ捨てたる捨てあらため哉
比翼もれしはあつれ葉の卯
来実よりさかふ人まつわかしかな

わんぱくもおしいれになる卯月　紅花
灌仏や二ッ三ッかしくほとゝぎす
麦の滴るとおもしれる椛のふる　蕉堂
一輪を陰に吸あくかなしんら　由丹
卯の花の咲しかす垣根落葉　枝
葉桜やちらふよ思ふ芽生へさむる
竹の子の若葉なしやかしこ　竹人
筍やおのれ小便すゆるく　抱道

雨上り蓑夜着ぬくめなりきさし　隣
聞たぬ秋らしの絶物まで郭公
時雨の三声に一念を流しける
流れ行す湯蒸の舟や　杜宇
竹の子も猿捨置く　蝸牛
笠流ふらうや酒瓶よかさつける
山の風清水陰やふるく流しける
ーーうらめしけれのみならぬ　芸水

菜今めく弱くかしましきなる哉
修光ハ初めゆへ前だ蚊きりて由
お作つし蝶乃せまハ糸てりたる
淋しかりし祇の蝶め皮むく那
皆しくさ寺さし通る蚊きり心
豆甲此下女と坊主りの句此り新
田植ゑわ笠さぬ讃る代近白し
讃此まん詠む尓こしまて田うゑ心

竟ひ返し豪西子此ゑや田うゑ附
田とてしかいしきこゑを行田うへ笠
踊しさき並ぬ母とし田うへ郷
蔵の家ゐ池りけ明さく田竹西
悉り代や梅みの松し詠数をる
本にわきハ業中もしさらし詠贅
うしつて膚の月と暑さくれかんこゝる
横席してや此歳あわ手んさる

卯波ゟ雨降出しきとも
杉よりは笠の暑さや夏旅　里
昼過しもしく家の門出して　羅心
村々口武蔵や床座さきあり
五月雨川紙風の横の織の筆
合歓の花小倍もわれど　ひらき近江
五月雨や坂ゐりものかよ姫　かな
雨みだれ松や此流人かくて行く子

毎夜情や人なしかゝる　北荒子　里
鼓ときの床より涼しや静か　荒子
鳥の来て扱ふ枝かな　楼桐の公
涼しさやぬれ舞の漢なき夏の夢
新涼しく金しく月の川長帳なる
手のひらに生しく年も見ぬ　坂也
夕顔や人の川ぬるむ雨　梅里
塊の来ての暮々　とさ芳女　豆庵

渫ゐ翁に大に横たはりおく黒ゐ郷
礼いふく鋼を橋にかける あつさゐの声
拘るこ子に負ふてかよふ ゐらと黒ゐれ
わ撥れ橋して能同のあつさゐ郷
深しさや無情杉急しに蛍のかをる
折ゐ池条おのほそくし椰のうくそ
追の翁く お乃場はから深くの声
ゑとる楠乃何くふゑる縁患清水の錦

蹄ひろくと遊し清かる清水影
蝉なくや峰のそきこ　一里塚

秋部

肌寒ゝ残機よ立爺可寛ふ乃秋、
出テ見れ沙所りし去庭妹の風
牽牛星をりし秋も立なり頃借庭
あさ露ぬらしなるしづくや風の音
出やしとしとる枝ち露や釣瓶縄
池新りさぬ松乃こて涼やさきめ秋、

旅行く人も行かよふ一とせふる
ありさ一とせふ比ぞや暦の端にも
ならひとし相くなるもの一とせ哉
葉さへ散ぬ梨の花はおもしろき桜
詣でし人は出なりし涼月桜
胴ぶかき桜や見しより比の河
月出の影星の盛や十の郷のうち
又の夜も目にはれし星の影の那

年無き者は坂も告ぐ頃帰るかな
来ふしや芹にもしめしき道北の
おもしろや文比し道世ぞ道北ぞ
ふ須若の手にもまれたる躍の那
見物の有るもの様に松まれの草
都の境で祇園まつりに躍る
衣川も名の世に詠む加茂の踊の車
辻番ぞ道し蛇もし行旅のかな

叱迄茂る江湖の傍や神あかり
稲妻や噓ほとゝの悲しさなぬひ
梟の母しく挊てる案や白木槿
よしやすきし東山より帰り蕎
竹刈の笛葉さしくせさしは薪
去年さき花の後たれ虫の声
いろいろの草々遠ふ野さへゝ
埃満る藤や下駄の穴目く

旅人に悲しさしたし鹿乃声
可旅るかゝし老わしせ鹿の庵
笠ふさる山と泣さく鹿乃こゑ
花残年を伽論泣せ旅の南
秋たへしと池乃秘よぬ旅の躰
尼寺の読しし涼しくきめつされ
いさりひの鄰とあはし磯のされ
子乃是爺の孫まし泣さく旅され

なきゝしは移りて蝉　柚味噌哉
雛遊やふりさのまさき雨　あり李
蝶乃吸ふりしは我ゝ雛　遊女
京なまり忘れて　野鳥哉
炎とのりしも吾山まは八川ゝ　右北ゝ
海ゝちゝて荘遊ゝ　花の毎哉
佛へ比ま尊山手ゝ　竜眠ゝの筆
粟稗も論乃月川ゝ　巻やわすれる

野ゝ聞きんまするなきゝ　調哉
康遊ふや呼ひ常に情　あり
滑稽して居りたまき本はて　指
蓮かわやこゝに在ゝる　辛夏婦有
紅葉に指やめゝてひゝく　龍田姫
鈎下まれ穿にも来て扉ゝ　積玲哉
之文森甚あ年は二人し　吾山子哉
手藤くいは遠かしゝの　蕪らしに

良暹（暹）はあはれ花とかなしひしか我
月の庵の軍おは東山忍
紫山子よの名残しも月の田刈我
機ふれは機織をしく田まか我
海の小作をつりにちりし若菜を
莫菁の小道となや猿の名に
先穀さんなまのかなて妹乃若
二大之大三アき広めり始乃若

虫籠より出るいを見ておはる
挑旅館旦那我まく折り我
婚心にみるる夜のちさの那
こはる桶より川影見る不破の自
坂の出るにおもてもやふの月
谷川や郎巨ふ秋の草もし帯
殿しは總礼月と涼わなの自
寝夕あま山子一秋代に承今日ぬ

十六夜や欠くにいふとも有の雲
世にいでし蝶や浮世の華乃露
我は法師や白衣に蝶と申さなん
酒買ふ庭のあるらんおかの菊
菜を背戸の細流にすゝぐ菜組
伯母持ちて見る後連て来る後の月
おもく寒れ夢見て明る夜や後の月
御宿かりして待をれ後の月

後れて芦の垣根を叢に虫あり
こし枯や招くしいかぎる虫の声
康衛して寺神とみちる秋
君にもみゆ女中めしてや秋の精
持て枯や錦して過行く蘋の華
行わるや手まとひしと旅の
穂乃花達はれ清く来て名に聞よ

冬部

雁のなく空と共に袖しくれ

傘一つに行くも借る物なれ

二人乗て一人はかゝし物の角

我もひの芝居すもの[illegible]

枕きくも落まくと[illegible]の角

木からしや山から[illegible]

風や麻あく矢橋のわたしかな
木枯やいそしし瀬ゝの松の枝も
ちりぬしや之保は記り木枯し捨
ここしさ萩の花こしかの萩かな哉
紫代戸にはつし踏迷ぬおちぞれ
鹿舟しは宿り日にさし萩もの角
芥き掃しし庭とは見えて萩かな哉
完操く机のくれもうれ哉きの角

土佐の絵年暑戸狩ちれぬ枯野哉
亘わかに人をとふ遥かに遠路一の跡
雛頭呆果ゆるく十兵への角
鴬棹の春人の記ぬ十夜の那
垣けひの中さしや岩く帰り客
行としも中くく蒼む小さく宿とくく
あとしかとしをあれ新の花帰りわた
紙と小れるく霜めぬ白川隅り客

片側に鴫のさし餌や帰りかね
麦まきや思ひしよりもおもしろき
川ばたの紅葉に残る大樽引
唐土も是は定めし青もじこぼれきて
麻のすゝきと落せり背戸の大根引
見かはす先は川辺に根びきたる菜の花
見仙や庭のまゝし鉢に萩小さき
見仙へ登りて霧やきりの露
菊さく夜めぐる一葉や気もさりし
比叡下りて雨の夜雉子に鳴きけり
散りてさへ露のさかりの北野の花
北山より鳥の池を京の京の雪
鷹狩や村田に鍬おも笠かぶり
志や錦まじり世を埋めつつ葉も
看経をきゝぬるたびの十夜かな
置きしぬ先や日の紫くけ

湯豆腐にあたゝまく茶をハ
蕎麦の月日たれても湯哉
長ふすね程として蕎麦湯哉
諏訪乃湖撫けし岩まで川ハ
神ハおりもし清めけぬかハの雨
拂く吹乃紀嵐たすさかりの外
火をちらし沖けろ秋の影哉
寐やふ小寐なとして寺もちとりぬ

蕎茶の質とし廿ほ也けらん
追剥乃諺くもすぐ来ぬ乃紙
神ならぬ身もあらぬ紙衣哉
之縁の膝したるハ来ぬ衣乃雨
きてすゞに行年をつす頭巾哉
如しもさ尻あろてさく頭巾の角
角ゆたもんにしも猶くハ頭巾哉
瓢しつさハ霜もし扨ぱ酢して哉

何くれと似ぬ声や鉢たゝき
雪の朝これあし跡や 沐芳
猶小の月ゆめの中や寒念仏
咲気川くまる影ともあり 安盛
楷の木や巨雄と京は梅かゝり
誘り行く梅か見えし月見る舘
粉路は花りと形して 烟代ちり
寒菊や咲けるとこし浅気乱

傾城のしらしく見えて湯浴那
埋火に葉雄にかして 仕舞節あり
梅さかは花も出てくみ森のこゑあり
風に匂る座りふ編てや冬こもり
たりき丹見ゆる宮や冬(?)の出羽
寒垢離や是人にゆる雪 此甲
初ましや鴨の目のは残し松嵐
跡つけぬ足は大雄也 雪見かな

重ねし庭に高ぬれはさけり　越
錦く掃しり新庭なよ雪の門
拾ひ取りや宗たゝ籠る書ゆる書
巨雄壹る茱尾あるは煙く書見せん
ことふ錦ふしのうくゆきの胡
休の庭し散落とたゝもや雪九常
筆れ新し古ゆこしゆきかれ毎
冷
おゝき海しき物や御室れ流ん麿

薪ばみしく眠ゝこれれて菜ふ行　林　賣叙
多臥い濃備ゐ蛸あわゆしの亭
掛ちや笑ふゐつてたかりまちり公ん
横くしにくう諸たえうき波緑の着
世れおや扇た宮ぬ年用意
燥掃や青砥かゝ撲す椽虎下

前書賛物部

菓旦

安らに遂てしこし方命あり齢

六十まで五つ路余りて誰ぞ

勢なきにはましといひて年

足ても老の身にひとゝせや福島州

伊勢乃松洲に詣まうて

也に遂るにも終にしもたちの庵まてして

庵ぬけりつす人かな

旋覆花
小車やわすれしの用に咲人ゑと
之ぶの姚むし詠まく
撰まれて梦飽しきもの夕さ

茶席は額を詰
葉は第や花まれの枝一川

雨中の夕秋
雨はかれ落さる気さの婦

書にお迷ふ人よ
胡分は二夜とも咲れは分迷

茶布の母は表は帛に
使乃蚊竜まへしまにかを迷

庵ぬ移す人に
高はは月にしくはこ枝なりし

武刕　下る人に送刕二句
名ところ嵐して篝しなるを逢我

路れえて富士はむりふに揚雲雀

　　鳥申の剃髪下

もろし捨てゝしまふ浅ぬ蝶の袖

おもふ子の父乃表は帰に

尤れこぼれし柳やあるも浅ふある

　　病中仲秋

名月や家に外待乃ふたしもし

　　同後月

蜻蛉も我影かりの後乃月

　　湯淵はいて海を

秋乃蝉 けり浅ちし人の年の句

　　古行の人は遠ちこの句

待しし文 るにこらむくゆしの旅

遠くくしてし姫しまろ比かつわしき

ゆ南しし海るちるや淵き頭ゆに

　　芭蕉庵

いつの世に誰かなぐさむ萱草

筆児法師を悼

筆は誰かの世に遺して胡蝶

閏四月化光子を哭す

人去りし後の卯月やほとゝぎす

胡蝶子母の喪に帰郷に

未とほし母なき郷やなまなか妹の雪

華岳を悼母無

昔こそ思ひの教しき竹の陰

人は七十に賀す

七十やまこと得ぬ様に有さかな

妣を一所にする民家へ

要し墳手に月出けり　秋納

五子を悼

豆数もしまて船の帆北の衣の年

含歓か母の妻は弟に

郷に遊ひて雲のながしけしは常

金毘羅奉納人のまゐりに

花あるし愁まる船かゝる哉

八恵東行を送る

此旅ゆく人乃こゝろ後歩中なすさ路

佐光子一周忌

一葉ちれ手向しさうの風車

妹しおくれ行く

く井かとはいき免ゆらしらしなく若れ

農業を子に譲りて隠居せるを

賀ふ

秋月川や淋の言葉なかゝけるを

島中の折御を送る

清遠く流る一小舟にて一人旅

武州蒲田の梅塚小兵衛

杜しうめや読んゆるゝ向

霜月七日に伯母君うせさせ給ふ
こし二日ふ語ひまゐらせし[illegible]
例ならぬ枕はなし錦の上
なりしさのことも思ふかたにて
皆の上に枕くしと帰く伯
此翁後中也し所よ用と悲き
返事も此あへる残り給ひし
せきとおもひしと云給ひけり

中々しくあまた此方へさらは
なりけるいとみ甚る一よの
世にはあらぬ事なり書つくる
妹従の年は此所にて給ふし草乃霜
洞雲の父の喪は除きにし
竹の子し尋ねぬるは泪月の跡
元光子伊勢比神戸長根きし
しのかつ浅茅に

菜の花をしたしみ名の華の首途哉

半紅子来りは述る

見送るや月めくらくまのむかひ

化光子三回忌

桃栗乃花ちらして帰し三年忌

呉酒子母乃裏は請ふ

たまきりしに一葉は庭の名残哉

本覚一周忌

きうちにわすれぬ日あかす百日紅

丈和子は失ひしに

疎の枝をふとしかなしき一ふさの卯

夜香父の喪は常に

麦の穂や中陰あるき詠めん来端

誠乃人を悔し法花に行脚

の草鞋は解しくつろぐ草廬

をとし訪人の幸門有りて移従

裏も此畧は芭蕉主人に
似も友月も老ゆる客は
まに謝してしらにふ性
ゆりして新知の人々旅や
いるく白昭の情はなよし
篇す無さ花り此をのつね
々公芳やせんし其の法は之
さに小さ雪し昔此人の心しあ

始まで辿りし間道の旅ね
の旅に路のしぐ俳人のなき趣
祖達ハ帰国乃ことのかなわしき
未面乃識りもの称ま人称れ
方こと又本迄あらずと冥草
乃一句ハ性徳ろく西照に伏ふ
凡寿とありしにみとハ暫め月や陪庵一室
去人ハわり庵ハ訪ハもの乞ぬ

かゝしはるを衰老の愚かは
くるしみさまなく更に
新古家なりて遣をし謝
なるうちはる立秋さる日数
これよりあき見えし木して
萬代なれば叩りてたゆりに
心まいくかくわすらぬの
西諸はなせし海にあやりし

己りし秋立はかりもしをいかで
鶺すわるうき枝に皇くかへる節や
殿鳴七児　声に訪れは
なる月の半國は冬に大根
此背たれ畠に鍬する
かさて去りし菜けり
おもしわて
こくなま海に大根も細し　妹の
細

是より北越に行脚して
神無月頃たる海濱の際に
亦立より小舟をさし於かる行
やしに旅ねを旅寝見送て
隔て遠く来りし跡を小御る天
南窓一周忌
多くの月日一年清てける旅葉哉
芭蕉忌

石菜の花は蓮にも為れ魂あり
人は悼けり
草は後家かしかく世はさへろ蝶
子は先ひとつる人も
遊さ母乃親とうる世の面鏡
雪の日信州乃秋は北にも遠き
哀れし錦をかさねて雪の袴の角
詠吟はハえ無く

遠き野やいつきのみえし人
雨の日信濃の友梅に訪ひて
うぐひすよ雪の嶺こし西の菴
吉備宮奉納のすゝめに
新春の囃しと恵みの信くし
再会の調は旅のこゝて来涌子
かの東征はおくる
見送る者も参らぬを偲の帷中

二月廿九日総昌寺に於て
寺へ来て詣でし妻のかへるを
本全母の裏は帛に
藤の花や妻にあたる袖は濡るゝは
可卜兵子のかげ遊ひて哉
こゝし来ぬあるとゆきし
二度としぬところは芥子の夕べ也
東條氏の東行を送る

ちしや稼康十日にゐらに廿日ゆ
祖乃百年も忘ふ逢し人ふ
句は詩さく
円ふとく久し年にゐ在て玉日ゆ
東都の君有なるものこ
詠ひ來るも生涯けさは
賀すとし玉かりし泰平の
地なりしこの詩録は記しかり

正月小
玉ぬ身は婉くこと示し雛段華
多く飾りしめ禄剝めく
閼伽棚し萎れ飾りや袖とぞれ
妻とし在て逢し人ふ
又来しも別ぬはいふぬりしめ水わ
巴良妻は母こそ偲ぶる
しし双親携え老ちさは加くして

巨椎めと称らくはかぬ二女史
三竹乃扇草は悼
ゑさといふ名にて称て拍雅哉
羽列浮鴻明神奉納
繪馬宣子らすしゃに二句
昔ありし新も藪の荒屋りと
称減してめもかけや池乃下
遠橋乃雪ともに紛は探りて

雪の頃や町より浮橋の山に
市中より世は遁遠し年の暮
世諦にかりいつしか人
亀のしく者しつき人の
根なき筆にて称あもすいふ
毎ときあそも称毎しくみかさ
かゝりし此も勝るの雲かゝ
てんし遂まてし

君りとは佳道ふ楽や浮世の門傍
信濃路や松本の府下ふ於て
天満宮の広前ふ奉納の
句はすしみちを追ふに
御社のありかたき相にも
思ひやるゝいとゆかしきあめ
かゝ境は海にゆかしき
君の歩道に思ひ居れて

わりしあらはおもえのき
神こと知道梅ふ香にも我か親ふ心
ゐく庵廿三回忌
流るゝし諸共にやよとふ之葉　芥
子供伴ひて流れ行る人
思ひきつ柳茅可老もひて行ふ翁の紀
七十賀に
みちく歩道杖ゆくゝ出風花に雨のかわ

浜漿神の句に題して夏日
　柿道人
口紅の色と涼しくりや友川遊其
　病起の人に賀して
煖きや起やおもくみ小春かな　菜鴉
　たはぶれ忌
今日ふみの袖をさへりぬる遊人
又

世の人の思ひあう枝遊す　塚の霜
　南窓三回忌
三年去ぬ蒙と立てり霜をしらぬ
霜月已矣り予の髪白かな
　祝して
髪白や延びる日中の冬至かな
　呉山先生七十賀す
斎ひぬ白寿も桃とどけりや花の春

堂に六道の額をかけし外
渓乃流をせきて戸中の
老泉を流しふる里に一本の
桜ありてさかりを見し
名もなき外とはせて花の折りしが
不還来ることなき別道を告
来るに扇を給ふとして
春の旅蕃に於るはいふならぬ

天満宮奉納
柏手やこしあきのゆくまへつれ中さ

賛物部

康将踊乃画賛

百やまとし踊き鹿鴻ハ之雀

菜乃かくり慈ハ羅ふ画

ましひしをぬるくし狗ふ乙ゑ之曲

雪ハ下蹴鶏の画

孫康乃窓ゆ湧くや雪ハ　虎耳中　ト夕

女の子猫を抱く画

ちよろ情やせめては猫の答とし

武蔵野不二の画

武蔵野やあらしは富士の雲の月

毒り鷺の画

色ことに青き鷺や知らぬ柳の下

蓮池にて

蓮乃実や又流人哉ふ知らぬかな

鷺の画り

霧霜の雪みて鷺の羽を恐れ

唐人乃馬乗画

とく吹こしいり月や詩ものかな

山水の

山寒く秋は一筆にて描きなし

柳と鯉の画　女筆

奥ふし若葉や女の名前柳は

衆乃法衣きて祇陀林く
画よ
梅さしぬ門はいつやら古き仏
三顛乃画賛
幾夜や出られば三川の新法師
春水やせて鵜の画
水くもし雁ぬ月まて御鵜かれ
瓢しれ女の出てる画よ

梅に鶯の声や一声うつ遠寺
月くし千鳥丸で行秋に画
三川や九と梅みる月の謝かれ
春くしやせて鷺
五六羽乃雪ほとりゆく友木立
柿あさみの画よ
月くしかくして猿にとし見え柳二ッ
梅に鶯の画

これとても絵に出梅の句あるとかや

芭蕉簑笠乃像に

二度目は桜にみし笠の雪

山は群鳥の画

月おそき空や追はれてとぶ雁

梅に雀の画

鶯は外にして梅になく雀

根乃連りかりしその雀

月よるに

水の月すくひかねつるらし

猩乃庭禅乃画に

衾(フスマ)着てぬれや猩乃あはれさと

波に燕の画

帰る浪くるゝ気や浦乃秋

樵夫の画に

冬枯や背中にしよふ年木樵

三平二満女のに

誰か待まち府をに飛出す人州

秋海棠の画

名をとりし眠るとしかよふ花の色

鬼の思ひ見えて葛加帳

払ふ大津絵に幅り

鬼の角一本 折迄て写ふ

立一本角り折迄つて頭巾の角

扉の波返しく犢鼻(フトシ)の寛されし

お染月見小夜とし似合ふよう哉

思ひ揚や嫐てる花くま京加帳

布袋の画

布袋の母とれ月見る画

杉の場に袋のせてる月見かな

女の傘さすかて花見る画

誰かあそこに傘さして初時雨

芙蓉に蝶の画

寐蝶り牡丹の葉にかくし哉

鐘馗乃女を負てる画

数ありぬの葉は木樵も背負なり

寒月に猿猴の画

自らしし人の手を袖にもちてむき

蕉翁乃像賛

香をくるし梅にて接もきし桜の木

更科田毎の月画

刈あとや月も田毎のすみか哉

盆山水画

涼風や自ゆり山のおもひとまる

蕉翁像賛

まふよきや遊ぶる梅乃影ぬらし

薔薇（イハラ）しけるの画

有まふ花や山も移れにせむなき

水流れて岸に添松二三本

朔日出たる小
木のまゝや緑り青苔銚子にて忍
傀儡師の袋張旅する画
是こそ笠り納る麦丸道辰し
鐘悠傘して袋張おきて
是れ手向してわたりえ
なる画
都ひとさて新人さし志されの傘比

遠山さくら華しと言わ
家有る画
山桜華にそれ乃出店の車
寄りて蝙蝠の画り
蝙蝠や名月渡しれ水かゝえ
月に壊乃画
新法師と月のある獅の月見哉
埃沈盛ふなるの画

烏一羽織こむ雪をかしに紀哉

荻葉の露乃袋拂散かすり

しもふ画り

うく路葉に平出と旅の数かな

竹ニ烏

本り雅しや竹よそ動く烏哉

旅僧の草鞋に細流ふ画

苍清く香り擾かなかわら哉

竹ニ雨東坡みかくる画

狗さえて拂ハぬ袖乃志くれ哉

山水乃画ニ

雪のしるとる墨絵の雪山かれ

張果老の画

狗乃出て路や引ら雪鄰して

海棠ニ鹿なる烏

花つれ鹿の目や海棠に戯れけり

菊に鶯のとまりたる画
草毎やいろしほ染し錦かは
春の野ならし蝶
菜の花のあかり野にまよふ胡蝶かな
葡萄の
ゆらし紫乃松にとゞきつる葡萄かな
蟷螂に蝙蝠の画
蝙蝠や暮かゝる星の光も月宵

梅に月乃画
薫は休ものゝ小月もなし
月に菜莟ありの画
枯ぬ穂の菜莟にありて見るゝ
梅に尾長鳥
長しなし尾長しなりしほとゝぎす
稲に流りの画
新米や庄屋の背戸に稲たし山

月に鶴の画に
朝日はなやかにさし出て夜鶴の声
しらぬ長瓢の腹より鶴出づる図
鶴の出しは実に出来かく画
雨に柳子寒しと緒かけ画
簑ときあるは返天と見えて世にはしきけす
細砕の生立の勢
涼しさや夜着をかけ醉る波の枝

布袋の絵に
新蕎麦に御芸腹のうへ毛なし
福禄寿に画
天窓もとし風のとらぬ重扇の布
雪に鷺
飛ひつゝ小積るやゆきに鷺一羽
木賊に松の画
有みつし根ちおとして木賊に松

井乃端ゟ燕の画

柳から飛出して松を追ふて燕かな

象の画

嗅ぎわける鼻の自由や梅の花

たせば雪の画

赤からぬ花ゆき白しやゝ芭蕉哉

女乃傘持たる画

戻りしも傘手にする春さの霞かな

布袋の耳かく画

二度目にも聞ることなかし郭公

桃に牛

勝りし桃ぬ花咲ふ生きも花代れ

寒山拾得

一葉もて昂こし不二に涼しの那

蜆子の雛逃さふ画

芋掘乃名もさゝしや雛ナ汕

牛牽蓑笠の画

此出立つんなりし人ゐのれとこ　星

高木に猿猴の画

猿も手の延ば遠こそ那　高木立

岩に群鳥の画

木の葉しや岩に寝ぐらくる夕鳥

蕉翁雪に蓑の笠縁に

古事ありしこ綾とぬある雪に　杖

獅子に牡丹の画

花もし揺ふ獅子や丹日に揚相ひ

大黒の手杵小袋はさしかき

竹のある画

搗く年や小槌の餅の音に合す

渓の柄に雀の画

なゐうはれ田手竹ふ雀の声

茄子小角豆の画

初この帝ニ出るは蜀魂（ホトヽキス）
作り雀
みしのおや子猷の翔席に小雀
女の画より画
雪のふれ也これの巨雄り侍人小
尾花千葉居
其しるとし尾花や人はもはさ勝
不二の裾よりのしある画

裾ふる里深みとし不二の流るゝわ
月入下に鬼の画
めし月はめのする鬼の每の法
猿巳しの画
三筋見る顔としとしみえ枝猿巳し
鐘り様の下に白梅子の画
地となしふかれ蝶し多達花の法

貞外

二見文臺乃画書之句

月花もはる極乃坂離や二見かた
扇もと浪のうつりやあらしみの
絵あふみや見とし二人のうら表

廻文

咲くこはく描くやすそてまみつはくみくさ

たいかへ歌筆者

嫁掃乃日をて露飛風吹けり
よしこれ如旦那先へ入りて帝皇
いひをしむ甲小雅婦母を迎へ
月あたへ漂ひて飛る年は萬歳
難し飛す
胡もしく文の棲みて楽しき康家は
傾くふしありて贅中れ小なり

附録

延享二年

彼廻路紀行

乙丑九月
君に従ひ奉りて卯月六日
浮ノ彼地ゟ尾陽小のぼる
一年彼是ありて海並の名は
待ちつる悦び人々 まだ

贈りあへる

卯乃花の下よりもぬけ逢ふ郡
めぐしくに別涙し武蔵の
人/\は溝かしに名残
杉しまらしゆかて流る
千ん花の粉くおとりくし
麦の穂の睫としぬまてく別来
七年に波涸の露となる

集り佳麦の花をいはし
ぬなかしに馬路のいりめぐ
きつのさつ達しつ前艶村薄し
下ゆきかしさとあそひ
かいきんいかあかきゆく修遊
庭の蝶酒を見ぬ郡して
色侍る遊ぶ風雅の本と
なしぬといへしは芸の友を

山をこえわたるかしこの
川を手わたりわたしと書付
まし参りて示兄ぬ人を
やとしさえぬめりく
猪の常の及ふまちく
何乃たえの河の井をたて
おとひより句をしかし
常に三井寺の籠して

所はこ西中国ヶ週行て出
我前るをと嫁きし夏の多りし哉
洲旅上尾りし泊る
七日
熊谷寺に直実の像おはしま
あるまし道のわきて
しるしに立たりしに
熊谷とし呆る坊主や芥子の花

今夜本庄ニ泊る
八日かく雪ふりて
そらのけしきもしや里も木も雪
深ふるさる道もしら
おくの形よ夜ほさし
綱ぞ無邪しさしふとし
さゝせわ雨乃人ニさやも
弘生ゆれ年のなわふ

灌
弘とし
なにし見ル洲の中なかで
みちれもよ年久しく
たくひやと飲つし
ゆきし道つとして梅ちしの花
桃秋根鼻ニ泊る
九日
碓氷峠ハ越えて猶ふ勝差
たとへつる漢路をえん

竹のしきハしりうし祝し吉日
ましゆく〓梅桃桜なと
夏としいしかく木の芽なと
しちゆうるやうなるしあり
たる
御前に出るにいみや
いとそいやしく気かふ色は
それしいとしきのしもふかし恵

赤白縁すうふ例の口すさ
みとしあるへし洲に縁色
しまいるやとしれとあいすれいる
塔の花しくはひく花に
中出る事しはらす中く
らいしへかにさわらしこて
しは有色〓との比とく
らし必聴あふ

綿入は去年の夏や花ざかり桜

雛の見ぬ山路も櫻さくら咲にし所

なとさ毎く句をよみける

にうらしありし袷を

御前より頂戴の事も

無くて中々思ひ追々小袖

扁の新調し染物間山のやう

うらみ見えてなかなか時なる

蚊

蚊やるゝもしさそう

きこり誰ほまうなかくれく

声なきさ毎夜しきの

いつはいはうし蚊を出しぬい

なそぬ煙は浅間山

武蔵和田小酒る

ほるしう子まして其方ゟも

いつる十郎よし気色

茶たしたことひえなかし

さゝめかしきにたえかねつゝわ
かゝる山路深くしのまゝは
大田津の遠は梧柳山とおし
ゆかなかし御に思棲山なし
よしなしていひくゝ兼は
はかなくしゆかし清遠く
かゞはに両日ぞ華紙やなる
たえをしゆゑなくしあやしれ

いかなるべき運案
論といえる書は九牲し
なれとはなるをつしられ
よみうしゆゑいつくし
義理新は持なき事
变うし濃く清れを
御しるし續きなるこに
さかりてみ茂叙

むかし見し夢の懐しさも長就坊

十一日

和田佛は出ぬれは越中

家まて来て旅の宿りを

まつさえ二人上かりに

橋のもとより見え日本

はしめて曇らぬ高き

よしなき道をして此里へ

都の地はまた見しそ

懐しと覚えぬやも節分

雪いおしくのこれるも

ふりしのゝ深みより

われゆくも限りしられぬ

かな

のちの身みの柏原山ならましを

行き深き人もつれおはと

ちこのひし谷乃鶯乃
こゑならぬ霞たなひけり
高き山里まて来にしを
おもしろみしかこのさき
う地の高き志けりやわら
藤若彼人をもせはこ給
けしきいと清くなる嫁し
花し本山よりの眺

十二日

けふ福嶋なる山村氏の
亭に人そのふ家居つき
くしきをかし見上けに
えもいはれぬけしきなと
けしきなしまつる鯛鯽みて
膳のおもてになりてよろ
山家のさまならん化し花

廻板乃鳴る日はきに江沫鼓とわ

十二日

静かなる露に於ふ一汁楼に

流る

臆る外し馬士にも心まかせて百合の花

源川寺に入りとのしへ

康名丸康御願人をこへ

雑士乃さわく自由に此

海つる跡しも於ねし

めしき跳ゐ於ふ吹うたれ

吹とらふ魚さされしとし

河しす

散とよの空眠くて筏に春嵐

此わつわとつくわれ田こし

以ふかる可人の指して

おし中

又いつか我枕此あさはぬはらしぬ
なこりやあら波人をうれて
足をとゞめしわか枕よ
あらねと旬はなうく袖ぬれい
哥よし人なもねひして
うし口甚くせていとかくはら
ゆきもしまふはやしき
森のうす笹侘しいひつたえ

六月

く沙の帰乃ゆく
うちま事那る庵小酒る

十四日

大井にとまる
山中をゆきて竹の
おさぎ下りて楠の梅やを
いふとの小ゆまりしいなあ
利ふ象の都ぬくしぬて

外れ不ば調して出たる
といふものしも侍
竹乃子も年々無して家路に稀ちかし

十五日

大田より酒あまる日
家より兎角行(?)けあるさ
句とりし

文樵輯

大尾

我の影安き荘偃思華達の於に
しはらく句集梓行乃事を
竟し於ての武人僕小客して
いろくわか遣ける此の出稿し
格子たく浮めつ於いて
常道手に於て庭ハ此書く編年
似たく世れ口さのなきハ批判しておし
きゆと閑々と枝ならし老とす

主吏ニ其名を告者なる小吏
荒番として甲斐守をはなち落
世居は家よ生まれて業とすれハ
我ゆなれ事に治世に遇して
武の修行窟に出身す相應
好むのミを老死世は隨きてさの
一癖のみあるす連にし家のすに
おもねらし鄙し家の摩ひすなる人

蕃としある葉へと花何の故ぞ深く
深めし人うゆりしの連絡を
よき御無しれしくあるに
揚あらハにして處分はなく
そえし卿統律りあたすやうきて
まとあり報しかは堆す棒行は楽の
赤鷹帽子あの青色の眼小さく殊と
僕ゝのとれくや無き事なし

達下に此する秘語の小巻後ヰ
是非記さんと請ふ請ふ但是
こゝろに叶す
遂月堂文想
明和四丁亥春

安永九庚子初稿写之　草哉

甲308 伊吉 乍中

奈秀